

「チュラロンコーン大学サマースクール 参加報告書」

京都大学農学部2年 作田淳弥

微笑みの国。タイはそんな異名を裏切らない国だった。たとえ値切り交渉でもめた後であっても最後にはタイの人は微笑んで見送ってくれる。時間に追われた日本人が失ってしまった何かを心のどこか大事にしているような、そんな気がした。よくタイの人はマイペンライ気質といわれている。タイ語で大丈夫という意味だ。なにか遠慮しているようにも感じられるが、実際に話してみるとマイペンライは特有のおおらかさに基づくものであり、細かいことは気にせず許してしまうタイの懐の深さを痛感した。出発前、タイというと東南アジアの一国であるイメージが強く、日本に比べて大幅に後れを取っている国のように感じられた。だが、その予想は大きく裏切られたのだった。タイ人の気質というのもその一つではあるが、日本人にも引けを取らない細やかな気配りとあの笑顔は本当にかけがえのないものであると感じた。今回のプログラム内の発表であるである交通に関しても新たな発見があった。発展途上国のイメージという中途半端に車社会が根付き渋滞がひどいイメージばかりがあった。実際にタイもそうではあるが、固化鉄道や地下鉄といった手段もあり、人々がこぞってそれらを利用していく様を見ていると将来的には日本のような鉄道社会が訪れるかもしれないとすら感じた。そんな交通の中で最も驚いたのは地方における交通網である。日本の交通は素晴らしいというのはよく取沙汰されることだが、地方に目を向けると一日数本のバスで遠い駅までいきこれまた本数のすくない列車に乗る。そして、運賃は人が乗らなすぎずするために異常なまでに高く設定されている。これは都市部ばかり優遇し、地方を無視した結果、地方経済を滞らせているともいえる。しかし、タイの地方は偶然か必然かは知らないが十分に機能している交通にあふれていた。もっとも国鉄は一日に数本であり頼りにはならないが、運賃の安さは圧倒的であり、地方の貧しい人が都心へ出てきやすいうになっていた。地方のバスはというと、路線バスこそ見かけないものの、ソンテウやロットゥーという独自の乗り物があり大変便利であった。これらはどちらも乗り合いバスではあるのだが時刻表がないという点で路線バスとは一線を画している。ソンテウはトラックの荷台に乗るもの、ロットゥーはワンボックスカーのものをさし、どちらも行先は決まっており乗車定員まで乗客が乗ると発車する仕組みをとっている。これらは10人程度が定員なので30分もあれば発車するというわけだ。特にソンテウは行先と経路が決まっておき、経路内の好きなところで乗り降りすることができる。日本の地方において高齢者がやむなく自家用車を運転する状況とは雲泥の差である。タイは劣っているばかりだと思ったら、このような状況であったので大変興味深かった。観光に関してもそうである。日本は増え続ける観光客が地元住民の生活を阻害し問題となっている。しかし、タイはというと日本を上回る観光客を抱えながら不思議なことにあまり観光公害という現象を聞かない。バンコクを例に挙げると、観光地と生活圏は完全に分かれており混在することはなかった。また、交通機関についても観光客はタクシーやトゥクトゥクに乗り法外な運賃を巻き上げられて経済を回す一方で、住民は値段的に安いバスや船に乗っていた。最近路線を急速に伸ばす地下鉄や高架鉄道も、住宅地の延伸を進め観光地には目もくれていない。以上書いたことは、タイの政府が狙って行ってきたことなのか、自然の成り行きなのかは十分には把握できなかったが、わかることとしては日本も見習うべきことが多数あるということだ。先進国と発展途上国という色眼鏡で見るとわかりにくいかもしれないが、よくよく観察すると進んでいる点や優れている点も見えてくる。タイは自分が思っていた以上に興味をそそられる国だった。

タイはかつての日本人が持っていた天皇に対する畏敬に似た尊敬心をいまだに国王に対して持っている。タイではかつて日本を走ったモノコックバスが走っている。タイは日本人と同じようにコメを食べるし、日本人が出汁をとってきたように、ナンプラーなどを駆使してうまみ成分を料理に加えている。地図の上では遠く離れているタイと日本だが、実際にはよく似た人種なのかもしれない。タイという国で過ごせば過ごすほど、そしてタイの人と話せば話すほど、私はタイのとりこになっていくように感じられた。これから急速に発展していくであろうタイとこれから少子高齢化に拍車がかかり経済も縮小傾向にある日本。似ているようで何か違うこの2国の学生が交流したというのはとても貴重なことであり、近い将来ここで得た経験や人脈を糧に世界をリードしていけたらと強く思っている。